

「イエス様のように愛しましょう」

使徒 20 : 35

『このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また主イエスご自身が『受けるよりも与える方が幸いである』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は万事につけ、あなたがたに示してきたのです。』(使徒 20 章 35 節)

■ 使徒パウロの働き～労苦する

今日のみことばである、労苦して弱い者を助け、すべてにおいてとあるこの場面では、使徒パウロがピレトで長老たちと別れの挨拶をしている時の話です。パウロは聖霊の導きにより召命を受けられ、3回の宣教旅行に出かけました。3回目に訪れた小アジアと呼ばれる地域の首都であるエペソで、長老たちと分かちあっていました。ローマの5大都市であるエペソは大事な拠点でした。使徒パウロは3回にわたって、いろいろな教会を建て上げられ、その中でもこのエペソ教会に3年間もの間、最も力を注がれたのです。エペソはアジアと中東、ヨーロッパをつなげる橋のような役割をする位置に置かれていたため、このエペソ教会の長老たちにとっても大切なミッションを与えました。パウロはこの宣教旅行を終え、エルサレムに戻ったのちは捕まり牢場に引き渡されると考えていました。だから今日のこの出会いが最後の別れになるかもしれないという思いで託し伝えています。

今日のみことばの、「労苦する」という言葉は、ギリシア語で「コピアオ」といわれ、「肉体的、精神的にとっても労苦する」という意味があります。使徒パウロは福音を伝える時、どのような場面においても情熱をもって伝え続ける人物です。使徒パウロは、自分が「労苦した」というように表現しています。教会への奉仕、また家族や子どもの養育のためにも私たちは苦勞があるでしょう。しかし、苦勞する人生は憐れではありません。本当に憐れな人生は、本当に命をかけるほどのものが見つからない人生です。私たちは、イエスキリストの中で、目標やビジョンをはっきりと握りしめていることが大切であることを信じて下さい。イエスキリストの心を持って誰かに仕えることを苦勞と思わないで下さい。

■ 使徒パウロの働き～弱い者を助ける

今日のみことばに「弱い者を助けなければならない」とあります。「弱い者」とは、霊的に未熟・肉体的な弱さ・孤独間などがあげられます。イエス様は弱いと思う方々の周りには強い人が必ず側にいるように送ってくださっています。人間にはプラスマイナスの考えがあり、自分が助けたら、助けた分を返してもらいたいという本能があります。しかし、見返りを求めず、最善を尽くしましょう。そうすれば必要なものは神様が与えて下さいます。私達が人に見返りを求めるなら人からしか返ってきませんが、神様に向くなら神様が必要なものを備えて下さるのです。

■ 小さき者に手を差し伸べる

マタイの福音書 25 章には特別なたとえ話が出てきます。天国の入り口で羊は入れるが、山羊は入れない。羊の群れにあたる人々はとても小さき者であり、山羊にあたる人々はその小さき者に手を差し伸べなかった人だと書かれています。これは、小さき者に手を差し伸べたのはイエスに手を差し伸べたこと、小さき者に手を差し伸べなかったのはイエス様に対しても手を差し伸べなかったことになるのです。あなたが本当にイエス様の愛を知っているなら、小さき者に当然に手を差し伸べるべきであるのです。初代教会のクリスチャンたちは信仰が故に大きな迫害を受けている人々です。ところが憐れな小さきクリスチャンたちがどうやって 300 年後にローマ全体を変える人々になったのか。それは彼らが持っていたとても大きな愛だったのです。

大きな伝染病が広まった時も飢饉が起きた時も、クリスチャンはその中に入り愛を施してきたのです。

■ ルカ 14 章 13, 14 節 義人の復活の時お返しを受ける

皆さんが誰かに愛を施した時に、返すことができない人であるならば、そのお返しは神様が下さるのです。イエス様が私たちを愛してくださったように皆さんもイエス様の愛のように誰かを愛してください。イエス様の愛とは一言でいうと、受けるよりも与える方が幸せに感じる愛です。

イエス様がそのように確におっしゃったと書いているのに、4つの福音書の中にもどこにも見当たりません。4つの福音書の中には、イエス様がおっしゃった言葉、行いがすべて記録されているわけではなく、代表的な重要な部分だけが書かれています。ヨハネの福音書 21 章 25 節の言葉からも、パウロの書いたパウロ書簡は認められるとペテロは認め、パウロがエペソ教会の長老たちに向けた言葉が信頼できるということが分かります。第 2 ペテロ 3 章 15 節にも記されているように、初代教会のリーダーであるペテロでさえも、このパウロの言葉は信じられると宣言しました。

マタイとヨハネは直接イエス様との体験を記録していますが、マルコとルカは、使徒たちが経験したり話していたことを記録しています。使徒の働きは、医学者のルカが、体験していなくても使徒たちから直接聞いたことを、科学的に精密にひとつひとつを記録しました。イエス様は、愛をどんなに施してもそれでもおさまらなく、自分の命までも下さいました。みなさんもイエス様のように、誰かにあげるときに人生を生きる喜びを感じるのではないのでしょうか。

■ イエス様の愛の方式

神様が願っているのは、私たちが授けた祝福を隣人と分かち合うことです。5つのパンと2匹の魚のみことばがありますが、どのように増えていったのか？と方法論が気になってしまいがちですが、これはイエス様が愛を伝える方式を語っているのです。イエス様の愛は割り算ではなく掛け算なのです。イエス様のように愛しましょう。私たちが持っている小さな僅かなものでも一つ一つ分かち合うことによって奇跡が成し遂げられるのです。

マタイの福音書 6 章 3 節、「あなたが施しをする時、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい」と書かれています。自分がしたことは覚えていないが、与えてもらった人は覚えているのです。誰かを助ける時は、必ず神様が覚えて下さっています。神様が記憶されればそれで充分なのです。

さいごに

愛するイエス様、イエス様が私たちを愛してくださったように私たちが互いに隣人を愛することができますように。父が家族のために、母が子どもたちのために、家族のために尽くして下さるように、そして愛する教会の家族達が教会を支え教会に仕えることを苦勞と思わないように、お互いに仕え誰かのために愛を流すことが祝福だと悟らせてください。そして何よりも神の形通りに造られた私たち人間同士の愛がもっとすばらしいことを悟らせてください。主を愛し、一つの魂を愛する本当のクリスチャンとして生きていくことができますように。

(要約者:河島 弘子)

(2024年2月4日)